

トルコ共和国イズニク市内にある 西暦 14–15 世紀のアラビア文字碑板

井 谷 銅 造

A survey of some important Arabic inscriptions
of the 14th–15th century in the city of Iznik, Turkey

Kozo ITANI

は じ め に

イズニクの町は、アナトリアの西部、トルコ共和国第一の都市であるイスタンブルから東南に直線で約 100km の距離にある古都である。古名をニカイア（Νίκαια）といい、紀元前 4 世紀の末にこの名を持つようになったという。¹⁾ この町を含む地域の古名はビテュニア（Βιθυνία）であり、町はイズニク湖（写真 1、東西約 30km、南北約 10km の大きさ、古名はアスカニア湖 Ασκάνη）の東端に位置しており、湖側を含む周囲にめぐらせた壮大な城壁の遺構が四つの主要な城門と共に、現在もところどころに残存している。イスタンブルからは、イエニカプーヤロヴァ間のフェリーを利用し、ヤロヴァからミニバスで約 4 時間、この地域の中心であるブルサの町までミニバスで約 1 時間の距離である。現在の町の人口は 2 万人余²⁾、これといった産業もない、ひなびた田舎町である。

この町は、ローマ帝国時代の 325 年コンスタンティヌス帝により招集された第 1 回公会議、さらにビザンティン帝国時代の 787 年に第 7 回公会議が開かれた場所として、キリスト教史上でも重要な役割を果たしている。1071 年のマラーズギルドの戦いの結果、セルジューク（セルジューク）朝の支配下、ムスリムとなっていたトゥルクマーンが大挙してアナトリアに進入

1) İznik Eğitim ve Öğretim Vakfı, *Tarih Boyunca İznik*, Türkiye İş Bankası Yayınları No.668, Sanat Dizisi.83, İstanbul, 2004 はトルコ共和国内外の研究者 15 名が寄稿した、最新のイズニク通史である。以下で引用する場合の略称は *Tarih Boyunca*

2) 正確には 20122 人。イズニク市の公式ホームページの人口統計による。（2007 年 9 月 18 日現在）
<http://www.iznik.bel.tr/>

し、マルマラ海に至るアナトリアを支配下においていった。かくして、現在のトルコ共和国に至る、アナトリアのトゥルク化、イスラーム化が開始されたのであるが、イズニクの町は、こうした歴史の中で重要な役割を果たしたと考えられる。1074/5 年イズニクはセルジुक家の一員である、ス



ライマーン・ブン・クタルムシュによって征服され、この人物を創建者とする国家（いわゆる「ルーム・セルジुक朝」）の最初の首都となった。³⁾ 首都コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）からさほど遠くないニカイアの町を、中央アジアの遊牧民出身である、ムスリム・トゥルク系のセルジुक朝に奪われたビザンティン帝国は、単独でセルジुक朝勢力を撃退できる状況にないと判断して、西欧キリスト教世界の代表者であったローマ教皇に使者を送って、窮状を訴え、援助を乞うた。こうしたビザンティン側からの要請もあり、且つは折からパレスティナで、聖地イェルサレムに向かうキリスト教徒の巡礼がムスリム支配者から妨害や危難を受けるという事件の発生も報告されていたため、時のローマ教皇ウルバヌス 2 世はクレルモンに招集した教会会議に先立って 1095 年 9 月 27 日に十字軍発動の提議・勧説をおこなった。これが世界史上に名高い十字軍運動のそもそもの契機である。西欧の各地からコンスタンティノープルに集結し、大挙してアナトリアに渡ってきた第 1 回十字軍の最初の軍事的な目標はイズニクの町であり、セルジुक朝側は抵抗を見せたものの、1097 年 6 月 19-20 日に十字軍の後援を受けたビザンティン帝国軍の手に奪回された。以後この町はビザンティン帝国の支配下に戻り、その後 1204 年第 4 回十字軍の際に、コンスタンティノープルが征服されてラテン帝国が建てられると、ビザンティン貴族の一部がニカイア（イズニク）に逃れ、この地を首都としてビザンティン帝国を復興した。（ニカイア帝国）1261 年にコンスタンティノープルが奪回されるまで、イズニク＝ニカイアには、ビザンティン帝国の亡命政権の一つであったラスカリス朝の宮廷が置かれていたのである。

14 世紀に入ると、アナトリアの中央部や東部を支配してきたルーム・セルジुक朝の勢力は全く衰え、その領域はイーラーンに本拠を置くモンゴル政権（イルハン国）とその後継勢力の支配をより強く受けるようになった。一方、アナトリアの西部にはモンゴル政権の支配は及ば

3) ルーム・セルジुक朝初期の歴史については、拙稿「大セルジुक朝」と「ルーム・セルジुक朝」『西南アジア研究』41、1994 年を参照。

ず、現代のトルコ語で「ウジのベイリク」⁴⁾と呼ばれる、小さいながらも独立した地方政権が叢生し、これらのベイリクは互いに覇を競いながら、支配地域のトゥルク化・イスラーム化を進めた。中でもビザンティン帝国の首都コンスタンティノーブルに最も近いビテュニア東部に本拠を持っていたオスマーン家は、異教徒への聖戦（ジハード、ガズワ）の担い手としての意識を強く持ち、勢力を拡大していった。オスマーン朝第2代の君主、オルハン・ベグ時代の1331年5月2日包囲・封鎖状況が長く続いた後、イズニクはオスマーン朝の軍隊に征服されて⁵⁾、ムスリム支配下の都市となった。本稿で扱う碑板などが残された建築物はすべて、イズニクの征服後に建設されたものである。オスマーン帝国の時代、15世紀からイズニクは独特の上質な陶器や陶板タイルの生産で特に有名となった。これらイズニク陶器の逸品は、イスタンブールのトプカプ宮殿博物館をはじめ、トルコ各地の博物館に展示されている他、欧米諸国にも有名なコレクションがある⁶⁾。但し、現在のイズニクでは土産物に使われる程度以上の陶器生産はおこなわれておらず、18世紀から陶器生産の中心は東南方のキュタフヤに移ったとされている。

本稿は、概略上記のような歴史を辿ってきたイズニクの町に現在残っている、西暦14-15世紀のアラビア文字碑板を紹介・解説することを目的とする。筆者はこれまで、昨年、一昨年の文学部紀要にトルコ共和国のアマスヤ市とニイデ市内にそれぞれある歴史的な碑文についての論文を発表してきた。⁷⁾ 今回のイズニクの碑板についての論文も前2篇と同じ意図で執筆し、解説の用語なども共通するために、前2篇と併せて読んでいただけると幸いである。筆者は1991年6月23日に初めてイズニクの町を訪れ、博物館や市内を巡ったほか、2004年8月16-17日にはイズニクを再訪し、博物館や市内で今回本稿で扱う歴史的な碑板⁸⁾などを実見、調査してきた。本稿では、イズニクに残存する碑板のみならず、それらと同時期もしくはそれらとの密接な関係があると思われる他の町の碑板も3点紹介、解説する。これまでに発表して

4) 「ウジ」(uj)はトゥルク語で「端、辺境」の意味。ベイリクはベグ(ベイ)を首長に戴く地方政権のことである。「ベグ」は突厥時代から用いられる、古いトゥルク語で、本来は軍事指導者、貴人、君長などの意味をもつ。

5) Halil İnalcık, İznik için Osman Gazi ve Bizans mücadelesi, *Tarih Boyunca*, ss.59-82

6) 筆者が実見できた例としては、ロンドンのVictoria & Albert Museumのものがある。Tim Stanley, *Palace and Mosque - Islamic Art from the Middle East*, V&A Publications, 2004. にはprobablyという譲歩付きながら、イズニク産陶器の優品が紹介されている。

7) 拙稿「トルコ共和国ニイデ市内にある西暦13-15世紀のアラビア文字碑文」『追手門学院大学文学部紀要』41、2005年。拙稿「トルコ共和国アマスヤ市内にある西暦13-15世紀のアラビア文字碑文」『追手門学院大学文学部紀要』42、2007年。以降に引用する場合は、拙稿「ニイデ」及び拙稿「アマスヤ」と略称。

8) 筆者はこれまでの論文の中ではずっと「碑文」という表現を用いてきた。しかし、京都大学大学院文学研究科教授、杉山正明先生のご教示によれば、東アジアでは「石碑」とは地面と垂直に建立されるものであり、表裏2面があり(側面に文字が刻まれている場合もある)、基底や頂上部にもしばしば装飾を伴った石造物が配置されるといった様態のものが多いようである。筆者がこれまで扱ってきた「碑文」は、建物の外壁にはめ込まれたプレート状のものが多く、建立された様態の石碑に刻まれたものではないので、他地域の碑文研究者の誤解を避けるため、以後は「碑板」という用語を用いることとする。

きた論文の中でも指摘してきたが、歴史的な碑板そのものが伝える情報量は少なく、また断片的である場合が少なくない。そのため碑板の伝える内容をより詳しく、また正確に理解するためには、他の文献資料の参照が欠かせない。特に本稿で扱う西暦 14-15 世紀のアナトリアの地方都市については、信頼するに足る歴史資料が豊富に残されているわけではないので、同時期の他の町の碑板などが大いに参考になるのである。

本稿で紹介・解説する碑板は全て Abudülhamit Tüfekçioğlu, *Erken Dönem Osmanlı Mimarisinde Yazı*, (『初期オスマーン朝建築における文字』) T.C. Kültür Bakanlığı Yayınları. 2642, Sanat Eserleri Dizisi. 365, Ankara, 2001. にアラビア文字のテキストや現代トルコ語訳が収録されている。筆者はこれまで発表した 2 篇の論文⁹⁾ でこの書物を参照してきたが、経験的に碑板テキストなどの解説の精度は高く、内容の信頼できる書物だと考えている。今回もテキストを提示するたびにこの書物の参照頁を挙げているが、その場合の略称は Tüfekçioğlu である。

イズニク市内にある西暦 14-15 世紀の歴史的に重要な碑板

現在のイズニクの町には中世以来の城壁や城塔が、ところどころ断絶しながらもよく残っている。徒歩で一周するのに 1 時間ほどの城壁である。西のイズニク湖岸門から東のレフケ門へ(写真 2)、そして北のイスタンブル門から南のイエニシェヒル門を貫いて町の 2 本のメイン・ストリートが通っており、東



西・南北のメイン・ストリートが交差する辺りが、現在も町の中心である。ビザンティン帝国時代に造られた、イスタンブルの壮大で著名な教会堂と同名のアヤ・ソフヤ教会の遺構もこの付近にある。現在の博物館(後述するニールーフアル・ハトゥンのイマーレトの建物)やイエシル・ジャーミウなどの歴史的な建造物は、町の中心から見て東北の一角に集中している。

9) 拙稿「アマスヤ」及び拙稿「トルコ共和国イスタンブル市内にあるファーティフ・スルターン・ムハンマド時代のふたつの碑文」追手門学院大学文学部『アジア文化学科年報』8、2005 年。以下での略称は、拙稿「ふたつの」。

①通称ハーッジー・ウズベク・マスジドの碑板 (写真3)

町の中心に近い南北方向の街路に面して、通称ハーッジー・ウズベク・マスジドと呼ばれている規模の小さなマスジドがある。このマスジドの内部、通りに面する壁の断面に、次のようなアラビア文字で3行分の碑板がはめ込まれている。以下、碑文のアラビア文字原文、日本語訳、解説の順に内容を紹介していく。(原文中の縦線は、原文中での改行を表わす。訳文中で_____は固有名詞、_____はそれらに付けられた修飾句、_____は讃辞や追悼句を表わしている。また【 】内は原語のカタカナ表記を、() 内は原文を補足したことを、それぞれ示している。)



(アラビア文字の原文)

عمر هذه المسجد المبارك | خالصا مخلصا لوجه الله تعالى | حاجي ذينل ابن محمد في تاريخه سنة
اربع وثلاثين وسبعمئة

(日本語訳)

至高なる神の顔に忠実に、純粹に、ハーッジー・ウズベク? (ザイナル?)・ブン・ムハンマドが734年に、この祝福されたマスジドを建設した。

(解説)

Tüfekçioğlu, 18. この碑板は、トュフェクチオウルがその著書で134点の碑刻銘文資料を挙げる中での最初のものである。734年(1333-4)という年代は、オスマーン朝の草創期に当たり、これ以前の年代記録を持つ建築物は、オスマーン朝の当時の領土内で見つかっていない。従って、この碑板が掲げられたマスジドは、現存する最古のオスマーン朝時代の建築物とすることができる。テキスト上の表現について、まず、マスジドという言葉に先行する指示代名詞は(هذه)となっているが、マスジドは男性名詞であるから正しくは(هذا)である。また、建設年代を表現する部分は(تاريخه)となっているが、通例では接尾形人称代名詞なしの(تاريخ)であろう。「至高なる」と訳した原語は(تعالى)と綴られているが、この綴りで「至高なる」の意味となる(تعالى)を表わしている場合は他にもある。¹⁰⁾

マスジド建設者の名前は「ウズベク」(اذبيك)と読まれてきたが、トュフェクチオウルは「ザイナル」(ذينل)と読んでいる。この場合は、後続する「ブン」の語は「イブン」となる。

10) 拙稿「ニイデ」8頁。また、トルコ共和国イスタンブール市内にある、有名なオスマーン帝国時代のスレイマニエ・ジャーミウの定礎・竣工を記録した碑板の中にも前置詞(على)が(عل)と綴られている例が見られる。

ブンまたはイブンはどちらもありうる形なので、どちらが正しいのか俄かには判断できない。語末の文字は、(ك)とも読めるが、そのまま素直に読めば、(J)である。また、13-14 世紀の西アジアやアナトリアのトゥルク語では、「ウズベク」という名前は、通常 (ازبك) と綴られるので、この碑板のような (اذبيل) の綴りで「ウズベク」と読むのには、無理がある。トュフェクチオウルも「ベク/ベグ」の綴りは同時代の他の碑板などでも (بك) となっているという例を挙げて、「ウズベク」の読み方を斥けている。それゆえ、筆者もトュフェクチオウルの読み方に賛同したいが、先述のように、ブンか、イブンか、という綴りの違いによって、ザイナルとは読めない場合もある。いずれにせよ、この碑板に現れるウズベクまたはザイナルは、他の歴史資料に名前が見出せないののでいずれが正しいのか、決定できないのである。

②イズニク博物館所蔵 Env. No. 501 碑板 (写真 4)

オスマーン朝時代のニールーフアル・ハトゥン (後述) のイマーレトが現在のイズニク博物館の建物である。建物の周囲の敷地内には、多数の、ビザンティン、オスマーン両帝国時代の墓石、石棺、墓碑銘が露天に並べられている。建物の入口脇の、屋根のある部分にこれから紹介する 4 点の重要な碑板が並べられている。博物館登録番号 501 とされるこの碑板は、アラビア文字で 4 行分あり、以下のような内容である。



(アラビア文字の原文)

ربنا تقبل منا انك انت السميع العليم | امر بعمارة هذا المسجد المبارك الاعز | الاكرم فتوة الاعيان
زين الحاج والحرمين الحاج | الحمزة بن اردمشاه احسن الله عواقبه في سنة ست واربعين وسبع مائة

(日本語訳)

我らが主よ！我らを受け入れよ。あなたは全てを聞き、全てを知るお方。([『クルアーン』 2-127 末尾) この祝福され、最も力強く、高貴なマスジドの建設を、貴顕中の模範、ザイヌルハーッジ・ワルハラマイン・ハーッジ・ハムザ・ブン・エルデムシャーフー神が彼の末路を良きものとするように—が 746 年に命じた。

(解説)

Tüfekçioğlu, 25.¹¹⁾ この碑板は、746 年 (1345-6) に建設が命じられ、現存しないマスジドに附されたもので、トュフェクチオウルの解説によれば、このマスジドは 1924 年に役所

11) この碑板のテキストは、Oktay Aslanapa, İznik'te Türk Mimari Eserleri, *Tarih Boyunca*, s.228 にも出ている。

(belediye) の建設の際に、後述の碑板③が掲げられていた墓廟と共に取り壊されたという。原文の表現中に意味不明の箇所、解説不能の言葉はない。マスジドの建設者、ハムザ・ブン・エルデムシャーフ (al-Hamza b. Erdemşah) については、次に挙げる碑板③中にもその名が挙げられるが、どのような人物であったのかは分からない。彼に付けられた修飾語は、「貴顕中の模範」「ザイヌル・ハーッジワルハラマイン」「ハーッジ」であり、後者は「巡礼と両聖地の飾り」の意味である。これらの表現からは、ハムザ・ブン・エルデムシャーフなる人物がマッカ巡礼の経験者であり、貴顕の一人であったことくらいしか分からない。

③イズニク博物館所蔵 Env. No. 502 碑板 (写真 5)

②の碑板と同じく、博物館の入口脇に並べられた碑板の一つ。アラビア文字で 3 行分あり、2～3 行目に左の側面から下部にかけて大きな割れ目 (破壊痕?) がある。

(アラビア文字の原文)

امر بعمارة المقام المبارك العبد الدارج | الى رحمة الله تعالى الحاج حمزة بن المرحوم اردمشاه |
تغمده الله برحمته وكان المعمار الحاجي علي في سنة خمسون وسبع مائة

(日本語訳)

(この) 祝福された場所【マカーム】の建設を、至高なる神の慈悲に近づく僕、故エルデムシャーフの息子、ハーッジ・ハムザ—神がその慈悲で彼を庇うように—が 750 年に命じた。建築家はハーッジー・アリーであった。

(解説)

Tüfekçioğlu, 28. 前述のように、この碑板は、②の碑板と同じくハーッジ・ハムザ・ブン・エルデムシャーフ (al-Hajj Hamza b. al-marhum Erdemşah) が、②の碑板が附されたマスジドが作られてから 4 年後の 750 年 (1349-50) にその建設を命じた墓廟に附されていたものである。建物の建築家がハーッジー・アリーであったこと、ハーッジー・ハムザの父エルデムシャーフの名に「故」という形容詞が付け加えられていることが②碑板にはない、新しい情報であるが、両碑板の情報を併せても、建設を命じた人物の特定はできない。年代部分の「50」という数詞が主格形の (خمسون) になっているが、正しくは (خمسین) という斜格形にならない。



④イズニク博物館所蔵 Env.No.505 碑板 (写真 6)

左側が大きく欠損し、残存する部分にも大きな割れ目が走っているが、次のような内容のアラビア文字で 5 行分の碑板である。

(アラビア文字の原文)

امر هذه العمارة الشريفة السلطان | اعلى اعلاه الله سلطان اورخان بن عثمان خلد الله | ملكه
للخدمة زين الحاج والحرمين حاجي با | وبركته واجرهما الله اجر المحسنين | ربيع الاول
واتمامها في شهر شوال المبارك لسنة خمس

(日本語訳)

この聖なる建物【イマーラ】
を・・・のスルターン、・・・
ー神が彼を高めるようにースルタ
ー、ウールハーン・ブン・ウス
マーニー神が彼の王権を永遠なら
しめるようにーが、ザイヌルハ
ーッジ・ワルハラマイン、ハーツ
ジー・バー・・・の祝福
を・・・神が善行を行なう者たち
の報いで彼ら二人に報いるように
ーの奉仕のために命じた。(建設の始まりは)・・・5 (または 50) 年のラビーウ 1 月であり、そ
の完成は祝福されたシャッワール月である。



(解説)

Tüfekçioğlu, 20. この碑板は左側約三分の一が欠損しており、2 行目を除いて、テキストを完全に確定できない。残存している部分から原文を再構すると以上ようになる。テキスト末尾の年代記録の部分は、「5」の部分の冒頭の文字しか読み取れない。これを頼りに、オスマーン朝第 2 代の君主オルハン（ウールハーン）の在位年代（1326-62）を考慮すれば、735 年（خمس وثلثين وسبعماية）、745 年（خمس واربعين وسبعالنة）、750 年（خمسين وسبعماية）、755 年（خمس وخمسين وسبعماية）の四つの可能性が考えられる。トュフェクチオウル及びこの建物の遺構の発掘にかかわった Oktay Aslanapa¹²⁾ は、特に説得的な理由を示さずに、735 年（1335）と考えている。735 年の場合は、「シャッワール月」という月名が碑板中にあるので、1335 年 5 月 25 日～6 月 22 日に完成したことになる。トュフェクチオウルやアスラナパが 735 年説を

12) Oktay Aslanapa, İznik'te Türk Mimari Eserleri, *Tarih Boyunca*, ss.223-7. アスラナパによれば、建物は「イマーレト・ジャーミウ」とされており、イズニクの南に向かう門であるイェニカプ門外 400 m ほどのところにあり、1963 年 6 月にイスタンブル大学文学部によって遺構の発掘が開始されたという。

採るのは、オルハンによるイズニク征服（1331.5.2.）に最も近い「・・5」年だから、というのが大きな理由で、他に確実な証拠があるわけではない。トルコの研究者はこのような場合、できるだけ古い年代を採りたがるようだが、確実にそうと分かる理由や記録がない以上、厳密には上記四つの可能性のいずれか、と考えておいた方がよいと思われる。

「ザイヌルハーッジ・・・」の表現は前出②碑板にも現れているが、④碑板ではそれに後続する固有名詞と思われる部分の冒頭は（...٤）という文字で綴られているので、②③碑板に現れる「ハムザ・ブン・エルデムシャーフ」とは別人のようである。

さて、この碑板には建築の施主である、オスマーン朝第2代の君主、オルハンの名前が明記されており、歴史的には大変貴重な碑板である。オスマーン朝の名祖となったオスマーンの時代に造られた建物やそれに附された碑板などは、現在まで全く知られておらず、実質的にはオルハン時代が、イスラーム国家オスマーン朝の始まりの時期である。この碑板の中でオルハンは「スルターン」という称号を附されているが、これはオスマーン朝の歴史の中で「スルターン」号を使用した最も早い時期に属するもの、と考えられる。

ここでこの碑板のオルハンの「スルターン」号使用を考える上での参考にするために、現在ブルサ市内に残っているオルハン時代の碑板を一つ紹介したい。

④b ブルサ市内に残るオルハン・マスジドの碑板（写真7）

ブルサは現在人口150万人以上を擁する産業都市に成長したが、元々はオスマーン朝の最初の首都が置かれた町で、古くから知られる温泉もある、風光明媚な古都であった。ここにはオスマーン朝初期の建築物が多く、それらの中には碑刻銘文資料を有するものも少なくない。ブルサはイズニクに先立って1326年にオスマーン朝のオルハンによって征服されており、そのオルハンが建てさせたジャーミウが現在も市の中心部に残っている。しかし、ここで紹介する「オルハン・マスジド」はそれとは異なり、現在建物は残っておらず、碑板だけが、市内にあるŞehadet Camiiの東面する入口上方に残されている。写真で見られるように、中心部と周囲に文字が配される形式で、次のような内容の碑板である。

（アラビア文字の原文）

（中心部）

بسم الله الرحمن الرحيم | قل هو الله احد الله الصمد | لم يلد لم يولد ولم يكن له كفوا احد | في
تأريخ سنة ثمان وثلثين وسبع مائة

（周囲）

امر المسجد المبارك لرضاء الله تعالى من بنى مسجدا لله بنى الله له بيتا في الجنة | اللهم اغفر
لصاحب هذا المسجد وهو الامير الكبير المعظم المجاهد | في الدين سلطان الغزاة غازي بن الغازي
شجاع الدولة والدين | والأفاق بهلوان زمانه اورخان بن عثمان ادام الله عمره

(日本語訳)

(中心部)

慈悲深く、慈愛遍ねき神の名において。言え、
彼こそは唯一神、永遠なる神、生まず、生まれ
ず、彼に匹敵するものはない。738 年に。

(周囲)

至高なる神の満足のために、(この) 祝福され
たマスジド (の建設) を命じた。神のためにマス
ジドを建てた者には、神が彼のために楽園に一つ
の家を建てるであろう。おお、神よ、このマスジ
ドの主を許し給え。その者とは、偉大にして偉大なるアミール、宗教において奮闘する者【ム
ジャーヒド】、ガーズィーたちのスルターン、ガーズィーの子のガーズィー、シュジャーウッ
ダウラ・ワッディーン・ワルアーファーク、時代の勇者【パフラヴァーン】、ウールハーン・
ブン・ウスマーン—神が彼の生涯を永続させるように—である。

(解説)

Tüfekçioğlu, 22-3. この碑板は、738 年 (1337-8) という年代がはっきり読み取れるので、オルハン (ウールハーン) 時代に造られたマスジド (建物は現存しない) に附されたものであることは疑いを容れない。この碑板中でオルハンは、「偉大なアミール」「宗教において奮闘する者」「ガーズィーたちのスルターン」「ガーズィーの子のガーズィー」「時代の勇者」という修飾語を付けられている。オスマーン朝の歴代君主がイスラームの聖戦に従事する者として「ガーズィー」や「ムジャーヒド」という称号を用いていたことは、枚挙に遑がないほどの実例がある。¹³⁾ 従ってこの碑板中でオスマーン朝草創期の第 2 代君主であるオルハンがこれらの称号や修飾語を用いていたことは、この時代からオスマーン家にとって「ガーズィー」や「ムジャーヒド」と称することがいかに重要であったかを示す好例となっている。また、親子代々ガーズィーの家柄であることを示す「ガーズィーの子のガーズィー」なる表現は、筆者の知る限り、他の碑板中などでは用いられることがなく、珍しい例である。これに代わって、オルハンの息子ムラード 1 世の時代からは、後述するように「スルターンの子のスルターン」という表現が通例になる。

「スルターン」という表現についても、先行する 13 世紀のセルジューク朝時代の碑刻銘文資料では、「最大のスルターン」「偉大なスルターン」などスルターンという言葉に形容詞が付けられるが、¹⁴⁾ ブルサに残るこの碑板では、「ガーズィーたちのスルターン」という表現で



13) 例えば、拙稿「アマスヤ」中の①、⑩碑板の解説参照。

14) 拙稿「ニイデ」中の①、②、③碑板、拙稿「アマスヤ」②、③碑板を参照。

あり、意味内容が異なる。14 世紀の前半、アナトリアの中・東部に残された碑刻銘文資料では、13 世紀までのセルジューク朝のスルターンたちと同じ「最大のスルターン」や「偉大なスルターン」という称号が用いられるのは、イルハン国のオルジェイトウ（在位 1304-16）、アブー・サイード（在位 1317-35）父子に限られており¹⁵⁾、アナトリア各地に割拠していた諸ベイリクの支配者たちが同じ称号を用いた実例は、筆者の知る限り、ない。諸ベイリクの支配者たちが碑板などで一般的に用いていた称号は、この碑板にも現れている「偉大なアミール」（الامير الكبير）であり、いまだ一ベイリクに過ぎなかった草創期オスマーン朝の君主オルハンの称号として、それは妥当なものであったと思われる。

碑板中オルハンのラカブとして出てくる「シュジャーウッダウラ・ワッディーン・ワルアーファーク」はこの時代にアナトリアを旅し、オルハン自身とも会見したことをその『旅行記』中で伝えているイブン・バットウータの記録と異なっている。イブン・バットウータの伝える「ブルサーのスルターン」（سلطان برصی）の名は、「イフティヤールッディーン・ウルハーン・ベク・ブン・スルターン・ウスマーン・ジューク」（اختيار الدين ارخان بك بن السلطان عثمان جوق）である。¹⁶⁾ オルハンのラカブがこの碑板にあるように「シュジャーウ」であったのか、それともイブン・バットウータが伝えるように「イフティヤール」であったのかは、正確には分からない。このようなラカブは、書物となった文献資料の他に、貨幣銘や碑板のような碑刻銘文資料中に用いられるのであるが、トゥフェクチオウルの手書を参考にしても、オルハン時代の建築物に付された碑板の中でオルハンのラカブが出てくるのは、ここで紹介したブルサの碑板だけである。一方、オスマーン朝の年代記などで初代オスマーン、第 2 代オルハンの同時代史料は残っていない。それゆえ、確実な根拠を以てオルハンのラカブを決定することができないのである。

12-13 世紀のセルジューク朝の時代は、君主のラカブは 1 代を通じて変わらず、君主は一人一人特定のラカブを用い続けたようである。13 世紀にアナトリアの中東部を支配していたセルジューク朝の君主たちは、ギヤースッディーン・カイホスロウ、イッズッディーン・カイカーウス、アラウッディーン・カイクバードのように、カイホスロウという名のスルターン 3 名は「ギヤース」（「救い」の意味）を、カイカーウスという名のスルターン 2 名は「イッズ」（「威力」の意味）を、カイクバードという名のスルターン 3 名は「アラウ」（「高位」の意味）というラカブを用いていた。これらは同時代の文献資料の他に、貨幣銘や建築物に付せられた碑板などの碑刻銘文史料中ではっきりと確認できる。しかし、14 世紀になると、このようなラ

15) 拙稿「ニイデ」中の⑥銘文、拙稿「アマスヤ」⑥碑板参照。

16) *Voyages d'Ibn Batoutah, texte arabe, accompagné d'une traduction par C. Defrémery et B.R. Sanguinetti, tome deuxième (deuxième tirage), Paris, 1877. p.324.* イブン・バットウータ、イブン・ジュザイ編、家島彦一訳注『大旅行記 3』平凡社、東洋文庫 630、1998.312 頁。

カブ使用の伝統は次第に弱まっていったようである。すでに指摘したことであるが¹⁷⁾、15 世紀になると、特にその後半には、オスマーン朝のスルターンが碑板上などで「～ドゥンヤー・ワッディーン」のようなラカブを使用する例は見つからなくなる。ここで取り上げたブルサのオルハン・マスジドの碑板の例を参考にすれば、オスマーン朝ではすでに 14 世紀前半、第 2 代オルハンの時代から 12-13 世紀のセルジューク朝時代、盛んに用いられた君主のラカブ使用は続いていたが、使用例は前代ほど厳密ではなく、場合によっては、一人の君主が 2 種類のラカブを用いることさえあったという状況が考えられるかもしれない。

⑤通称イエシル・ジャーミウ入口上方の二つの碑板

現在イズニク博物館として使用されているニールーフアル・ハトゥン・イマーラトの通りをはさんで、50 m ほどの距離に通称イエシル・ジャーミウ（トルコ語で、「緑のジャーミウ」の意味）と呼ばれているジャーミウがある。（写真 8）このジャーミウはイズニク中で、最も美しく、また有名な建築物である。



この建物の入口外壁の上方（2）と、主礼拝室（son cemaat yeri）の入口の上方（1）に、それぞれアラビア文字で 1 行分（写真 9）と 3 行分の碑板（写真 10）が掲げられている。

（1）（アラビア文字の原文）

بسم الله الرحمن الرحيم الحمد لوليه الحمد بنى وعمر هذه العمارة الشريفة خالصا لله تعالى في زمن
الملك الكبير | شهاب الدنيا والدين مراد بك بن مرحوم اورخان بك عفا الله عنهما وباجازته مولى المكرم
المعظم مولانا | خير الملة والدين خليل بن علي الجندري غفر الله لهما ولمن يصلى فيها وذلك في
سنة ثمانين وسبعمائة والحمد لله وحده

（2）（アラビア文字の原文）

بانيه حاجي بن موسى | امر ببناء هذا المسجد ملك العلماء والوزراء خير الدين باشا نور مرقدته سنة
ثمانين وسبعمائة ووقع اتمامه سنة اربع وتسعين وسبعمائة

（日本語訳）

（1）慈悲深く、慈愛遍ねき神の名において。称賛の主に称賛あれ。この至高なる神に属する、

17) 拙稿「アマスヤ」18 頁参照。

聖なる建物【イマーラ】を、偉大な王、故ウールハーン・ベグの息子、シハーブドウンヤー・ワッディーン・ムラード・ベグー神が彼ら二人を赦すように一の時代に、彼の許可を以て、高貴で偉大なるマウラー、マウラーナー・ハイルルミッラ・ワッディーン・ハリール・ブン・アリー・ジャンダリー神が彼ら二人とそこで礼拝する者を赦すように一が建設した。これは、780年のことであった。



唯一なる神に称賛あれ。

(2) 建築者はハーッジー・ブン・ムーサー。このマスジドの建設を、ウラマーとワズィールたちの王、ハイルッディーン・パーシャーその墓所が照らされるように一が780年に命じた。その完成は794年であった。

(解説)

Tüfekçioğlu, 43-44. 同じ建物に付せられた二つの碑板であるが、内容にある年代の違いから(1)は定礎の780年(1378-9)を記録した碑板、(2)は竣工の794年(1391-2)を記録した碑板であると考えられる。この間にこのジャーミウ建設の施主であるハイルッディーン・パシヤは故人となったことが(2)の内容から分かる。(1)碑板で「マウラーナー・ハイルルミッラ・ワッディーン・ハリール・ブン・アリー・ジャンダリー」という名前が現れる人物は、ウラマー出身で、イズニク、ブルサのカーディーを歴任した後、宰相となり、同時にベイレルベイ(軍司令官)職を兼務して行政と軍事の両面で影響力を行使し、オスマーン朝発展の基礎を築き、彼の子孫たちも以後のオスマーン朝宮廷で重きをなした名門「チャンドルル」家の始祖である。チャンドルル一族については、トルコの碩学イスマーイール・ハック・ウズンチャルシュルが専著を残しており、この二つの碑板もテキストが収録されている。¹⁸⁾

筆者が(1)碑板の内容について興味を抱いたのは、当時のオスマーン朝第3代君主、ムラード1世についての表現である。まず、ムラードはこの碑板で「ムラード・ベグ」と呼ばれ、「偉大な王」と称されている。また、ラカブは「シハーブドウンヤー・ワッディーン」であ

18) İsmail Hakkı Uzunçarşılı, *Çandarlı Vezir Ailesi*, 3.baskı, Ankara. 1988. s.23. 以下での略称は、*Uzunçarşılı, Çandarlı*

る。ところが、この碑板と作成年代に近い別の碑板には、ムラードについて次のような表現が現れるのである。

⑤b アンカラ民族学博物館所蔵 Env.No.44 碑板（写真 11）

現在のトルコ共和国の首都アンカラ市内にある民族学博物館（Etnografya Müzesi）の外庭に Çankırıkapı Köprüsü kitabesi と呼ばれている、アラビア文字で 4 行分の次のような碑板が展示（放置？）されている。

（アラビア文字の原文）

في ايام دولت الملك العادل الغازي السلطان الاعظم غياث | الدنيا والدين ابو الفتح مراد خان بن
اورخان خلد الله دولته عامر | العمارة هذه القنطرة العبد الضعيف محمد بن لاجن اجر الله خاتمه وكتبه
| بخطه في التاريخ اواخر من شهر محرم المكرم سنة سبع وسبعين وسبعمانه البنا حاجي

（日本語訳）

公正にしてガーズイーたる王、最大のスルターン、ギヤースッドウンヤー・ワッディーン・
アブルファトフ・ムラード・ハーン・ブン・ウールハーン神が彼の国運を永遠ならしめるよ
うに一の御世、このアーチ橋【カントラ】の建設者は弱き僕、ムハンマド・ブン・ラージン神
が彼の結末にほうびを与えるように一である。彼は自らの手で 777 年ムハッラム月の下旬
にこれを書いた。建築者ハージー。

（解説）

Tüfekçioğlu,37. この碑板は少し文字部分が欠損し、一部読み取りがたいところもあるが、ほぼ間違いなく上記のような原文である。年代は 777 年ムハッラム月下旬（1375.6.22.-7.1.）であるから、イズニクのイエシル・ジャーミウの定礎に先立つこと、3 年である。日本語



訳で「御世」と訳した原語は（ایام دولت）であるが、正書法上正しくは（ایام دولة）である。また、トュフェクチオウルはこの碑板が付せられたアーチ橋を造らせ、この碑板を自ら書いたという人物の父の名を（لاجر）と読んでいるが、正しくは「ラージン」（لاجن）であろう。11 世紀のトゥルク語をアラビア語で解説したマフムード・カーシュガリー著『トゥルク諸語集成』には次のような説明がある。¹⁹⁾

19) Kaşgarlı Mahmud, *Divanü Lugatî't-Türk*, Tıpkıbasım, Ankara, 1990. s.206.

لاجن الشاهين وهو من جوارح الطيور وبه يسمى الرجل لاجين في بطالته

日本語に訳すと、

ラージンは鷹の一種であり、それは猛禽類である。勇猛な男はラージーンと名づけられる。

さて、この碑板によると、当時のオスマーン朝の君主ムラード1世は、「公正にしてガーズィーたる王」「最大のスルターン」であり、「ギヤースッドウンヤー・ワッディーン」「アブルファトフ・ムラード・ハーン」と称されている。イズニクのイエシル・ジャーミウの定礎碑板に現れる「偉大な王」「シハーブドウンヤー・ワッディーン」「ムラード・ベグ」とは表現上大きな差異がある。このような表現上の大きな差異が生じてきた原因は何であろうか。ラクブが「ギヤース」と「シハーブ」（「炎」または「流星」の意味）のように異なるのは、先述のオルハンの例のように、初期のオスマーン朝におけるラクブ使用の特徴ということで説明がつくかもしれない。しかし、この碑板のように、オスマーン朝の君主がいつ、どのような理由で、「最大のスルターン」「アブルファトフ・ムラード・ハーン」と称し始めたのかは分からない。特に「ベグ」と「ハーン」がほぼ同時代といえるふたつの碑板上で使用されている例は、初期オスマーン朝国家のあり方、およびその君主の地位を考える上で重要なポイントであるが、残念ながら、今のところ筆者にはこの問題に説得的な解答を与えることができるだけの根拠が準備できていない。

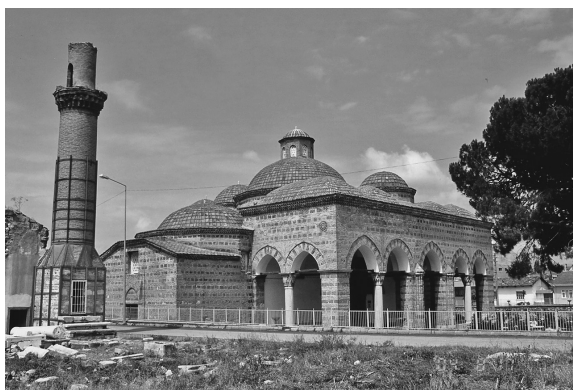
ただし、これまで10年以上にわたって続けてきた12-16世紀西アジア、中央アジア地域の碑刻銘文史料研究の成果からいえば、14世紀の初期オスマーン朝は、いまだ草創期にあり、その第2代、第3代君主であるオルハンやムラード1世が、本来は、そして通常は「ベグ」を称していたのではないかと、という印象を持っている。先に引用したイブン・バットゥータやイズニクのイエシル・ジャーミウの定礎碑文に現れる「オルハン・ベグ」「ムラード・ベグ」という表現がその有力な根拠となる。その一方で、オルハン時代にバルカン半島側（ルーメリ）への渡海に成功し、聖戦に従事する辺境国家として領土を拡大し、実力を蓄えてきたオスマーン朝は、それらの実績を背景に、トゥルク人の歴史・伝統の中で明らかに「ベグ」よりも上位にある称号である「ハーン」号を使用し始めたのかもしれない。事実としてムラード1世以後のオスマーン朝の歴代君主は、「ハーン」号を使用し続け、この称号はオスマーン帝国が滅亡する20世紀まで変わらなかったのである。こうした以後のオスマーン朝君主の「ハーン」号使用の歴史を考えると、ここで紹介した碑板中の「ムラード・ハーン」という表現が、碑刻銘文資料中最初の例であると考えられる。

12～13世紀のアナトリアを支配していたセルジुक朝では、支配者が「ハーン」という称号を使用した例は、文献資料中でも、また碑刻銘文資料中でも全く見当たらない。アナトリアで「ハーン」号が使用された例は、14世紀前半のアナトリア中・東部におけるイルハン国の支配者、ガザン（在位1295-1304）、オルジェイトウ、アブー・サイードの3名についてだけ

で、筆者の知る限りでは、それも 4 例しかない。²⁰⁾ オスマーン朝の君主がいかなる理由や事情で、また何を先例として「ハーン」号を使用し始めたのかは、今のところ、他の文献上からも明確な答えを得られていない。

⑥ニールーフアル・ハトゥン・イマーレト入口上方の碑板

イエシル・ジャーミウに近く通りをはさんで 50 m ほどの距離にニールーフアル・ハトゥンのイマーレト（貧民のためのスープ配給所）がある。現在の建物（写真 12）は修復されてイズニク博物館として使用されている。先述の②③④碑板は、現在この博物館の所蔵品である。この建物自体の入り口上方に、アラビア文字で 3 行分の次のような碑板（写真 13）が残されている。



（アラビア文字の原文）

امر ببناء هذه العمارة المباركة الشريفة لازالت معمورة الملك المعظم الخاقان المكرم | سلطان مراد بن اورخان خلد الله مملكته لوالدته المرحومة المغفورة ناشرة الخيرات سيدة المخدرات | نيلوفر خاتون تعمدها بالغفران في اول جمادى الاول لسنة تسعين وسبعمائه

（日本語訳）

偉大なる王、高貴なるハーン、スルターンの子のスルターン、ムラード・ブン・ウールハーン—神が彼の王国を永遠ならしめるように—が、故人となったその母、善行を広める者であり、深窓育



ちの女性たちの主人、ニールーフアル・ハートウーン—（神が）赦しを以て彼女を庇うように—のために、790 年ジュマダー 1 月の最初に、この祝福された、聖なるイマーラー繁栄し続けるように—の建設を命じた。

20) トルコ共和国トカト市内の博物館に所蔵される碑板 2 点（ガザンとオルジェイトゥ時代）サムスン市内の内城マスジド入口上方の碑板、パザル市内ジュマ・マスジドの碑板（それぞれアブー・サイド時代）。

(解説)

Tüfekçioğlu, 69. この碑板は、オスマーン朝第3代の君主ムラード1世がその母、故ニールーフアル・ハトゥンのために建てたイマーラ（イマーレト）に付されたもので、日付は790年ジュマダーI月初日（1388.5.8.）である。碑板に現れる「ニールーフアル・ハトゥーン」（「ニールーフアル」はペルシア語で、「睡蓮」の意味）はオルハンの妻で、14世紀の前半アナトリアを旅行したイブン・バットウータは、ヤズニーク（يزنيك）と表記されるイズニクの町でこの女性に会っており、「善行に勤しみ、高潔な女性」と評している。²¹⁾ この碑板はムラード自身が建設を命じたイマーレトに付されたもので、ムラードは自らを「偉大なる王」「高貴なるハーカーン」「スルターンの子のスルターン」と称している。この三つの称号のうちで最も注目されるのは、「高貴なるハーカーン」という称号である。まず、これ以前のオスマーン朝時代の碑刻銘文資料に「ハーカーン」という称号は、次に挙げるゲリボルのウル・ジャーミウの碑板以外、現れることがない。12-13世紀のアナトリアでは、先述の「ハーン」号と同じく、文献資料中でも、また碑刻銘文資料中でも、セルジューク朝の支配者が「ハーカーン」を名乗った例は全く見当たらない。アナトリアで「ハーカーン」号が用いられた碑板例は、14世紀前半イルハン国のガザン及びオルジェイトウの時代に用いられた各一例が知られているに過ぎない。²²⁾ 称号の使用先例という面からは、この碑板における「ハーカーン」号の使用はきわめて注目される例なのである。

ムラードが使用した「偉大なる王」は先述した⑤碑板（780年）に使用例があるので、特に用法が目新しいわけではない。「スルターンの子のスルターン」は④b碑板の中で「ガーズィーの子のガーズィー」と称されていたものが「スルターン」に変化したもので、以後のオスマーン朝歴代君主が盛んに用いた称号である。ここでイズニクのニールーフアル・ハトゥン・イマーレトの定礎に先立つ年代を持つ、チャナッカレ海峡に面する港町ゲリボルのウル・ジャーミウに残された再建碑板を紹介し、イズニクのこの碑板との類似点を挙げてみたい。

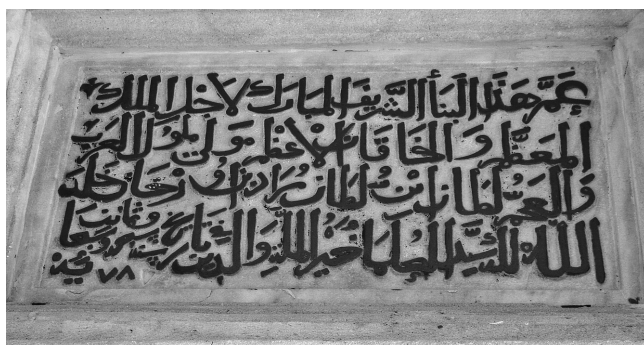
⑥b ゲリボルのウル・ジャーミウ南面する入口上方の碑板（写真14）

ゲリボルは、チャナッカレ（ダーダネルス）海峡に面する港町で、オスマーン朝のバルカン半島（ルーメリ）進出の拠点でもあった。オルハン時代の1352年、ビザンティン帝国の内紛に乗じてオスマーン朝は皇子スライマーンを頭として初めてバルカン半島側に出兵し、後に

21) *Voyages d'Ibn Batoutah*, texte arabe, accompagné d'une traduction par C. Defrémery et B.R. Sanguinetti, tome deuxième (deuxième tirage), Paris, 1877. p.323. このテキストの表記では (بيون خاتون) となっている。イブン・バットウータ、イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注『大旅行記3』平凡社、東洋文庫630、1998.313頁。

22) ガザンの例は、先述脚注20で紹介したトカト博物館所蔵 Env. No.812. 碑板。オルジェイトウの例は拙稿「アマスヤ」碑板④である。

広大な領土を有することになる大帝国の西側に伸びる翼が成長し始める。その拠点となったのが、現在のゲリボルの町で、16 世紀に有名な『海洋の書』を著したピーリー・レイースもこの町の出身である。ゲリボル市内の中心にあるウル・ジャーミウ



は、創建以来 3 度の改修を経て現在は原型をとどめない、モダンなスタイルに変わっているが、南側の入口には、アラビア文字で 4 行分の、第 1 回の再建を記念する碑板が掲げられている。

(アラビア文字の原文)

عمر هذا البناء الشريف المبارك لاجل الملك | المعظم والخاقان الاعظم مولى ملوك العرب | والعجم
سلطان ابن سلطان مراد بن اورخان خلد | الله ملكه سيد العلماء خير الملة والدين في تاريخ سنة سبعة
وثمانين وسبعمائة 787

(日本語訳)

偉大なる王、最大のハーカーン、アラブとアジャムの王たちの主人、スルターンの子のスルターン、ムラード・ブン・ウールハーン神が彼の王権を永遠ならしめるように一のために、ウラマーの主人、ハイルルミッラ・ワッディーンが 787 年に、この祝福された、聖なる建物を再建した。

(解説)

Tüfekçioğlu, 56. 碑板が付せられた建物（ジャーミウ）の再建者は「ハイルルミッラ・ワッディーン」すなわち、先述したイズニクのイエシル・ジャーミウを建設させたチャンダルルー族の始祖ハリールである。それゆえ、ウズンチャルシュルのチャンダルルー族についての専著にもこの碑板のテキストが収録されている。²³⁾ この碑文の末尾にはアラビア文字の数字で「787」の文字が刻まれている。この碑板は 787 年（1385-6）の再建を記録したもので、ここではムラード 1 世は、「偉大なる王」「最大のハーカーン」「アラブとアジャムの王たちの主人」「スルターンの子のスルターン」と称されている。これら 4 つの称号のうちで、「偉大なる王」「スルターンの子のスルターン」は先述のイズニクのイマーレトの碑板にも出てくるが、年代的にはこちらの方が 3 年早い。イズニクでは「高貴なるハーカーン」であったが、ゲリボルの方は「最大のハーカーン」という表現になっている。いずれにせよ、ムラード 1 世の時代から

23) Uzunçarşılı, Çandarlı s.27.

オスマーン朝では支配者の称号として「ハーカーン」という表現が用いられ始めたことは間違いない。今ひとつの「アラブとアジャムの王たちの主人」という表現は、類似の表現が13世紀のセルジुक朝時代に用いられたことが知られている。²⁴⁾ その意味では、この表現は少し「復古的」なイメージを伴っているとでもいうことができるかもしれない。

ゲリボルのウル・ジャーミウには、この碑板の他に後世2度の改修を記録した碑板が残っている。いずれもオスマーン・トゥルク語の韻文で書かれており、その一つ（東側入口の上方）は、1088年（1677-8）の年代を持ち、（皇子）ガーズィー・スライマーンがこの地域（*ایلری*）を征服し、ゲリボルに近い Bolayır（*بولایر*）で死んだこと、後にアフマド・アガ（*أحمد آغا*）という人物がこのジャーミウを拡張・改修したことを伝えている。もう一つ（北側入口上方）は、さらに後世のもので、皇子ガーズィー・スライマーンによってこの礼拝所（*معبد*）が創建されたこと、及びオスマーン朝末期のスルターン、アブドゥルハミード・ハーン2世時代の1307年（1889-90）に、このジャーミウが新しい様式で（*با طرز جدید*）改修されたことを伝えている。

⑦イズニク博物館所蔵 Env. No. 500 碑板（写真15）

上記①②③碑板と同じく、現在のイズニク博物館となっているニールーフアル・ハトゥン・イマーレトの入口に並べられた碑板の一つで、アラビア文字で3行分のテキストを有する。

（アラビア文字の原文）

بسم الله الرحمن الرحيم امر ببناء هذه العمارة الشريفة المباركة | الوزير الاعلم الاعدل ابراهيم باشا
ابن المرحوم خير الدين باشا دام ظلّه في | يوم الاثنين الثالث من جمادى الآخرة سنة ثمان وعشرين
وثمانمائة وتمامها في ثلثين وثمانمائة

（日本語訳）

慈悲深く、慈愛遍ねき神の名
において。故ハイルッディ
ン・パーシャーの息子、最も知
識あり、公正なるワズィール、
イブラーヒム・パーシャー
その影が永續するように一が
828年ジュマダーII月3日月
曜日に、この祝福された、聖な
る建物【イマーラ】の建設を命じた。その完成は、830年のことである。



24) 拙稿「ニイデ」①②③碑板参照。いずれもセルジुक朝のスルターンたちの称号で、「アラブとアジャムのスルターンたちの主人」という表現で出て来る。

(解説)

Tüfekçioğlu, 196. この碑板は、⑤⑥ b 碑板を残したチャンダルルー族の始祖であるハイルッディーン・パシャの息子であるイブラーヒームが建設したイマーレトに付されたものである。定礎の日付は 828 年ジュマダー II 月 3 日 (1425.4.22) であり、竣工は 830 年 (1426-7) である。上述のように、オスマーン朝初期の有力者、功臣であり、国家の基盤を築く上で大きな役割を果たしたチャンダルルー族については、トルコの碩学ウズンチャルシュルによるすぐれた専著があり、その書物にもテキストが収録されている。²⁵⁾

ウズンチャルシュルの研究によれば、この碑板に名前が現れるイブラーヒーム・パシャはハイルッディーン・パシャの息子の一人であり、1402 年のアンカラの戦後、一時「空位時代」を迎えたオスマーン朝において、初め、ユルドゥルム・バーヤズィード (1 世) の息子の一人であるムーサー・チェレビーに仕えていたらしい。その後アナトリアで強勢となり、ブルサにあったバーヤズィード 1 世のもう一人の息子、ムハンマド 1 世の許へ移り、ワズィール (宰相) となった。1421 年ムハンマド 1 世の没後、その最有力ワズィールであったバーヤズィード・パシャがルーメリでのスルターン位僭称者ムスタファー討伐に派遣されたが、却って捕えられ、処刑された²⁶⁾ 後を受けて新スルターン・ムラード 2 世の「大宰相」となったという。その後 832 年ズルカアダ月 24 日 (1429.8.25.) に亡くなったらしい。²⁷⁾

この碑板は、イブラーヒーム・パシャがムラード 2 世の大宰相を務めていた時代のもので、スルターンの名は現れないものの、イブラーヒームは自らを「最も知識あり、公正なるワズィール」と呼んでいる。これは、ウラマー層の出身で、オスマーン朝の中枢部において父子 2 代にわたってワズィールを務め、名門化しつつあったチャンダルルー族にふさわしい称号であった。イブラーヒーム・パシャの長子ハリールは、父の死後「大宰相」に拔擢され、その後 22 年、オスマーン朝国家の統治機構の頂点にあって国政を主宰したことはよく知られている。

⑧マフムード・チェレビー・ジャーミウ入口上方の碑板 (写真 16)

町の中心から南方のイエニシェヒル門に向かう通りの東側に、マフムード・チェレビー・ジャーミウがある。このジャーミウの建物外郭ではなく、内部の主礼拝室 (son cemaat yeri)



25) Uzunçarşılı, Çandarlı s.53.

26) バーヤズィード・パシャがアマスヤに作らせたジャーミウが残っている。拙稿「アマスヤ」15-6 頁参照。

27) Uzunçarşılı, Çandarlı ss.46-52.

入口上部に、次のような内容のアラビア文字で3行分の碑板が掲げられている。

(アラビア文字の原文)

بنى هذا المسجد قرة عين الامارة وثمرة دوحة الوزارة صاحب الخيرات والمبرات وخابب العوائد
والمسرات محمود جلبى لا زالت خيراته متوالية | ودولته متعالية ابن الصاحب الاعظم الناصب الافخم
| المرحوم السعيد المغفور والشهيد ابراهيم باشا نور الله مضجعه زمان دولة الملك واوان السلطان |
ناصر رايات الهدى والايمان خافض منابر الكفر والطغيان حافظ البلاد بنمط الامن والامان مراد بن
محمد خان خلد مملكته وايد دولته في سنة ست واربعين وثمانمائة هجرية الحمد لله وحده

(日本語訳)

スルターンであり、王である、導きと信仰の旗幟を立てる者、压制と不信仰の説教壇を低下
させる者、安全と安心のやり方で諸国を守る者、ムラード・ブン・ムハンマド・ハーナーその
王国が永遠とされ、その国運が永続されるように一の御世、ヒジュラ暦 846 年に、最高のサ
ーヒブ、最も卓越した任命者、故イブラーヒーム・パーシャー神が彼の寝台を光で満たすよ
うに一の息子である、アミール位の眼の慰め、ワズィール職の高木の果実、様々な慈善行為の
施主、慣習と喜びの実のなる者、マフムード・チャラビーその慈善行為が継続し、その命運
が高められるように一がこのマスジドを建設した。唯一の神に称賛あれ。

(解説)

Tüfekçioğlu, 258. この碑板は前出⑦碑板に現れるチャンダルル一族出身の「大宰相」イブラ
ーヒーム・パシャの息子である、マフムード・チェレビーがヒジュラ暦 846 年 (1442-3) に建
てたマスジドに付されたものである。本稿の碑板⑤、⑥b にその名が現れるハイルッディーン
の孫に当たり、ウズンチャルシュルのチャンダルル一族についての専著にも、この碑板のテ
クストが載せられている。²⁸⁾ この碑板がかなり錯綜した書体で書かれているために、ウズン
チャルシュルのテクストには5箇所誤読がある。1行目の (خاصب) を (خاصيا)、(المسرات)
を (المعبدات)、2行目の (الملك) を (ملك)、3行目の (منابر) を (منات)、(بنمط) を (بسط) と読
んでいる。ウズンチャルシュルは翻訳を載せていないので、他は誤植の可能性もあるが、4番
目に挙げた (منات) をウズンチャルシュルは、「マナート(女神)」と取っているのは、碩学らし
からぬ誤読と言わねばならない。また、意味は変わらないが、マスジドの建設者、マフムード・
チェレビーの名をウズンチャルシュルは「チェレビー・マフムード」と逆転させて載せている。

ウズンチャルシュルによれば、マフムード・チェレビーは当時の大宰相、ハリール・パシャ
の弟で、オスマーン朝のスルターン、ムハンマド1世の女婿であったという。彼は、1444年
マジャール(ハンガリー)軍を主体とする対オスマーン「十字軍」と衝突した、ニシュの戦い
で、当時のマジャールの実力者、フンヤディ・ヤーノシュの待ち伏せ攻撃にあい、捕虜となっ

28) Uzunçarşılı, Çandarlı s.99.

たらしい。その後、ムラード 2 世が「十字軍」と講和した際に、7 万ドゥカート（金貨）の身代金を支払って解放された。その後の動静は明らかでない、ということである。²⁹⁾

おわりに

以上、本稿ではアナトリア西部のイズニクの町に残る西暦 14-15 世紀の碑文 8 点、及びそれらと関連のある 3 点（ブルサ市内、アンカラの民族博物館、ゲリボル市内）の碑板を紹介し、それぞれに解説を付けることで、碑板が作られた背景を考察してみた。結論として、以下の 5 点をまとめておきたい。

- (1) 碑板①はオスマーン朝時代に造られた最古のジャーミウに付せられたものであること、ただし、このジャーミウを造らせた人物の名前は、「ハーッジー・ウズベク」ではなく、「ハーッジー・ザイナル」である可能性があるが、決定的な証拠はない。
- (2) 碑板②、③はともに「ハーッジ・ハムザ・ブン・エルデムシャーフ」の造らせた建物に付されたものであるが、このハムザがいかなる人物であったのかは不明。
- (3) 碑板④、④b、⑤、⑤b、⑥、⑥b にはオスマーン朝第 2 代、第 3 代の君主であったオルハン、及びムラード 1 世の名が現れる。しかし、例えばオスマーン朝の君主がいつから公式に「スルターン」という称号を使用し始めたのか、「ハーカーン」という称号をどのような背景と理由から使用し始めたのか、などの点は今のところ明確な解答が出せていない。オルハンのラカブが「シュジャーウ」であったのか、あるいはイブン・バットウータの伝える「イフティヤール」であったのか、ムラード 1 世のラカブが「シハーブ」あるいは「ギヤース」であったのかも容易に決定しがたい。両方のラカブが、12-3 世紀のセルジューク朝時代ほど厳密でなく使い分けられていた可能性もある。いずれにせよ、15 世紀後半以後オスマーン朝の碑刻銘文資料では「〜ドゥンヤー・ワッディーン」などのラカブの使用が見られなくなる傾向がある。
- (4) 碑板⑤、⑥b、⑦、⑧はいずれも初期オスマーン朝時代の功臣、名門であったチャンドルルー族 3 代にわたる人物（ハリール・イブラーヒーム・マフムード・チェレビー）の残したものであり、ゲリボルやイズニクの町と初期オスマーン朝及び、チャンドルルー族の特別なつながりを明示する碑板であるということができる。
- (5) 本稿で取り上げた碑板はどれもホンモノであり、後世の模刻や偽作などは含まれていない、と考えられる。これは、これまで筆者の発表してきた論文の中で一貫して指摘してきたことであるが、本稿の碑板類についてもそのままあてはまる。そしてこれらの碑板は、真正の歴史資料として利用できるもので、初期オスマーン朝の歴史、国家のあり方、君主の意識などを考える上で大きな価値を持つ、貴重な存在なのである。

29) Uzunçarşılı, Çandarlı ss.97-8.